

ヘンリー・モアと永遠の哲学

Henry More and the Perennial Philosophy

枝村 祥平

EDAMURA Shohei

はじめに

近代初めにおいて、イングランドのケンブリッジにはプラトン哲学の強い影響のもと、優れた形而上学と信仰心を両立させようとする哲学者たちが現れた¹。今では彼らはケンブリッジ・プラトニストと呼ばれている。エルンスト・カッシーラーが記すところによれば、ジョン・コレット (John Colet, 1467-1519) がイタリアに渡りイングランドに戻ることによってイタリアの人文主義を本国に取り入れることになったのが、ケンブリッジ・プラトニズムの萌芽となる²。そして最初のケンブリッジ・プラトニストと目されているのがベンジャミン・ウィチカット (Benjamin Whichcote, 1609-83) で、理性を重んじるべきことと、スコラ的な学問よりも神の生命に直接触れるのが重要であることを説き、ケンブリッジにおける哲学の一つの流れを形成した³。ウィチカットに影響を受けた年少の人物たち、ヘンリー・モア (Henry More, 1614-87)、ラルフ・カドワース (Ralph Cudworth, 1617-88)、アン・コンウェー (Anne Conway, 1631-79) などにより、ケンブリッジ・プラトニズムは最盛期を迎えることになる。

さて本論では上に挙げた中でも代表的な人物であるヘンリー・モアを、「永遠の哲学 (philosophia perennis, perennial philosophy)」という思想史上重要な概念を踏まえて論じる。永遠の哲学とは、ギリシア、ヘブライ、カルデア、エジプト人などの古代の文献にすでに表現されていた普遍的な哲学のことであり、アゴスティノ・ステウコ (Agostino Steuco, 1497-1548) などは文献を精査することでその内容を明らかにしようとしたのである。モアの哲学的著作を見ると、たしかにモアはフィチーノ、ステウコなどのスタイルを引き継ぎ、古代の様々な文献に普遍的な思想を見出そうとしていることがわかる。また、モアの特徴としては、プラトンや新プラトン主義の哲学以上に、モーセやカバラを重視している点が挙げられる。つまり彼は、ギリシアの哲学者たちがヘブライ人の哲学の影響を受けたとし、人類に福音をもたらした預言者モーセは哲学者としても別格だったという想定をしているのである。さらにモアは、一方で特定宗派の儀礼や集団的な熱狂に依存せず、個人が生得的な能力に基づいて神に接し真の幸福を得ることができるとしているが、他方でその生得的な能力が理性かそうでないかが明確でなく、結果として主知主義的な伝統にも反主知主義的で神秘主義的な伝統にも繋がり得る二面性を持った人物となっている。

本論ではまず、モアがどのような生涯を送ったのかをまとめ、かつ独創的で体系的な形

而上学者であったモアの哲学を概観する。そして、モアが永遠の哲学の伝統において尊ばれてきた古代の人物やそうした伝統に携わってきたルネサンス以降の人物をどのように評価していたのかを示し、その上で総括的な考察をしようと思う。

1. モアの生涯

ヘンリー・モアは1614年10月12日にリンカンシャーLincolnshireのグランサム Grantham に、アレクサンダー、アン夫妻の7人目の息子として生まれた⁴。父アレクサンダーはカルヴァン派で地元の名士であり、グランサムの市長にもなった。

ヘンリー・モアはグランサムで英文法学校に通い、1628年にイートン校に入った。叔父であるガブリエル・モアはケンブリッジ大学のクライストカレッジでフェローをしていたので、1631年にヘンリーをカレッジに招いた⁵。ヘンリーはここでロバート・ゲル (Robert Gell, ?-1665) に師事し⁶、学士号を1636年に⁷、39年には修士号を取った⁸。39年は、四歳年下のカドワースが修士号を取った年でもあり、両者はケンブリッジにおいて交流した。また同年、ヘンリー・モアは教会の助祭にもなり、牧師としての生活をおくるにあたり叔父に援助をうけたという。1641年にはケンブリッジ大学のフェローになるが、このころ、優秀な聖書学者であったジョセフ・メイド (Joseph Mede, 1586-1639) からの影響も受けた⁹。

ピューリタンの性向を持った学生によくあることだったが、モアは学生時代に学んだスコラ的な哲学に失望した。やがてモアは、プラトンの思想に惹かれ、ケンブリッジでは新プラトン主義の哲学に傾倒することになった。創作意欲にもかられたモアは、1639年から40年にかけてエドマンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1522?-99) にならった哲学的な詩を書き、42年には魂についてのプラトン主義的な歌集を出版することにした¹⁰。その後もモアは、理性的な神学を理論的に構築しようとする姿勢とともに、彼の詩に表現されるような感情的体験を重視する姿勢を持ち続けていた。

モアはまた、早い時期にカルヴァン派の予定説に反対し、叔父や兄弟とも予定説を巡って意見が対立したという。モアによれば、予定説は道徳にも有害であり、真の宗教の教説ではありえないのである。モアが、カルヴァンが考えたような全てを決定する力強い神にかわって考えたのは、道徳的にこれ以上なく完全であり賞賛に値するような神である。

モアは1640年代にロンドンでサミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib, c.1600-1662) とも交流した¹¹。ハートリブは自然科学や教育学など多くの分野に通じ、かつヨーロッパ中に文通相手を持っていた人物であったが、ハートリブを通じてモアは後にルネ・デカルト (René Descartes, 1596-1650) と文通をすることになる。ただ後になると、ロバート・ボイル (Robert Boyle, 1627-91) とともに実験科学を重んじていたハートリブは、過度に思弁的と思えるモアと距離を置きたくなったようである¹²。

1646年にモアはデカルトの『哲学原理』を読み、大きな影響を受けた¹³。やがてモアは、

ケンブリッジで学生たちにデカルトの機械論的な哲学を教え、極めて早い時期にデカルト哲学をブリテン島で伝播するという役を買った。そしてモアは、1648年に最初の書簡をデカルトに書いた。彼らの間には合計で四つの書簡が残されているが、最初の二つの書簡に関しては返事があったものの、デカルトが亡くなったため後の二つに関しては返事を得られなかった。これらの書簡で、モアはデカルトに敬意を示しながらも、動植物を複雑な機械とみなすデカルトの考え方を、人間をも複雑な機械にすぎないとみなす思想に繋がりをものとして警戒した。以降、モアはデカルトの哲学を評価し様々なところで援用しながらも、それに対してより批判的になってゆく。例えば、1653年に書いた『無神論の解毒剤 *An Antidote against Atheism*』でモアは、物質は精神なしには思考できないだけでなく動くこともできないという主張を強調し、デカルト哲学は物質が思考できないことは示したが精神なしに動くことができないことを十分に示せなかったとして、その不備を突いている。

1659年には『魂の不死 *The Immortality of the Soul*』が出版されるが、これはホブズを強く意識した唯物論批判の著作である。ただ、ここで示されたモアの自然靈魂 (Spirit of Nature) という概念はほとんどの同時代の人々に批判的に扱われ、カドワースだけが真剣にこれを受け取っていた¹⁴。1660年には『信心の大いなる神秘の説明 *An Explanation of the Grand Mystery of Godliness*』が出され、モアはそこで、キリスト教徒が最小限の原理・教説を共有し共存していくことを訴え、党派的な対立を抑制し、かつ逸脱した熱狂をも抑えようとした。モアの哲学的な著作集は1662年にまとめられ、この著作集はさらに1679年に彼の全集にはいることになる¹⁵。

1660年代は、アン・コンウェーとの交流が盛んになった時期でもある。アンはエドワード・コンウェーと1650年に結婚したが¹⁶、エドワードはロンドンの家にモアを連れてきて歓迎し、近所の人達に紹介しただけでなく、妻ができるだけモアから哲学の教えを受け交流するようにさせた¹⁷。モアとアンは長い間書簡を交わしていたが、その話題は様々な事柄に及んでいた。

モアは1670年に錬金術とカバラに精通したフランシスクス・メルクリウス・ファン・ヘルモント (Franciscus Mercurius van Helmont, 1614-99) に会った¹⁸。ヘルモントがケンブリッジを訪れたとき、彼らの間では黙示録、終末に関する話題、魂の先在説に関する議論などがかわされたという。

ただ、同じころ、アン・コンウェーはファン・ヘルモントを通じてクェーカーに接近し、クェーカーが理性を軽視し過度に熱狂的であると考えていたモアを失望させた。そして両者は疎遠になってしまった。アン・コンウェーと袂をわかってからは、モアは孤立したが、もっぱら宗教的な著作を書きながら静かな生活を送っていた。そして1687年9月1日に、ケンブリッジのキャンパスで穏やかに一生を終えた。

2. モアの哲学

モアは、誤った哲学に従ってしまうと、魂が死と共に消え去り来世に行くことはなく、また敬虔な心を持つようつとめる理由もないと考えてしまうようになる、と警鐘を鳴らしている¹⁹。モアが理想とするのは、ここでの批判対象の真逆であり、正義と敬虔が尊ばれ、神の存在が確認されており、かつ魂の不死を示しその不死性を踏まえた生き方を求める哲学である。

2.1 主知主義的神学

モアは、神が知性を持ち客観的な善を実現する存在であると確信していた。そして、驚くべき動植物を作り出した神は、それ自体知性的な存在でなければならないとも考えたのである²⁰。また、物質は自ら動くことも秩序だった共働もできないので、物質のそうした動きもまた宇宙全体の叡智に満ちた作者の存在を示す、ともされている²¹。

モアは神の知性によって何が善であり何がそうでないかは決まっていると考えた²²。そして神の知性はどのような創造の行いが善であるか、どのような宇宙をつくるのが善であるかを告げる。そして知性によって告げられた結論を、神は意志によって選ぶのである。モアによれば、世界は最高の叡智によって調整されているので、世界が偶然によって形成されているという考え方は退けられざるを得ない。

2.2 時空論

モアによれば、全ての物質を取り除いても空間が残る²³。そしてその空間は無限の広がりを持っており、そうした途方もないものは神から結果したものとしか考えられないという。

モアは二種類の絶対空間を要請する論証を導入している²⁴。一つ目は矢を使ったものである。矢が赤道線上の地点から、地面からみて垂直な弾道で発射されたとする。地球を参照枠とすれば、矢は垂直に上り垂直に落ちるということになるだろう。しかし地球は自転公転しているので、実際の矢の軌道は直線ではなくて曲線でなければならない。そうすると、矢の真の軌道を定義するような参照枠が必要であり、それが絶対空間だということである。

二つ目の論証は、シリンダーを使ったものである。シリンダーが底面の中心軸を中心に回転していると想像してみよう。その場合と、シリンダーが回転していない場合とは同一ではないはずであり、実際回転しているシリンダーは中に水がはいってれば表面が平面ではなくて円錐状になる。モアによると、デカルト哲学は空間と物質を区別しないので、この二つのケースの違いがなぜ出てくるのかをうまく説明できないということになる。

またモアは時間に関しても、なるほど我々はそれが始まりも終わりも持たないと想像することはできないが、実際は時間は始まりや終わりも持たず必然的な連続的持続を持って

いるとする²⁵。そしてモアは、無限の絶対時間や絶対空間を例えば三つの部分にわけるとはできるかもしれないが、それらの部分はいずれも無限であると考え²⁶。

さらにモアは無限の空間の中に、有限な広がりがある宇宙が存在していると考えた。そしてその宇宙は至る所物質で充実して稠密であり、宇宙内部での真空は存在しないと考えたのである。ただモアは真空が形而上学的に不可能だと考えていたわけではなく、神が仮に望むのなら真空を作り出すことも可能だとされている²⁷。その上で、アリストテレスが示唆しているように自然の世界に無駄はなく、神は無駄な場所をほっておかないので、現実には真空は宇宙に存在しないことになったとモアは考えるのである²⁸。

2.3 自然的モナドと自然靈魂

モアは自然の世界を形成する最小単位である「自然的モナド physical monad」の存在を認めた²⁹。しかし、デモクリトスたちが考えた単に分割不可能なアトムとは異なり、自然的モナドはそもそも形を持たず無限に小さいとされている³⁰。

またモアは、宇宙全体が秩序だった運動・進行をみせていることを説明するにあたり、自然靈魂 Spirit of Nature を要請する³¹。自然靈魂は神から流出し³²、宇宙全体にいきわたっている「この世界、大いなる自動機械に対してはたらいっている、神の代理的な力 the Vicarious Power of God upon this great Automaton, the World」であり、諸事物の形成にも寄与しているという³³。例えば、自然靈魂は植物の形成にすら関与するのである。

2.4 魂の不死

モアは魂は不可分で物質のように分割して壊すことができないとし、魂は身体から分離されうるともした³⁴。のみならず、モアはオリゲネスに由来し正統神学の中では認められていなかった考え方をとりいれ³⁵、受精や誕生以前に魂が既に存在しているとした³⁶。モアは、神が人間の性的交渉と同時的に宇宙に介入して、魂を個別的に創造するとは考えなくなかったようである。モアはさらに、動物の魂もまた道徳的な性質とか理性はもたないが少なくとも存続を続けると考える³⁷。

モアによると、人間の高貴な内的原理は、原罪によって覆い隠されてはいる。それでも、人間の魂が動物的な本性に打ち勝ち神的な原理をあらわにすること、彼は希望を見出したのである。

3. モアによる先人論

3.1 モーセとカバラ

モアは、モーセは形而上学的真理を認識したが、周りの人間はほとんどそれらを理解できないと考えて明示的には書き記さなかった、と解釈する。ただモーセは、ごく限られた理解力のある人たちにカバラという形でそうした真理を伝えたというのである。

モアは異教徒たちがユダヤ教徒やキリスト教徒から独立に三位一体の真理にたどり着いたのではなく、モーセに由来する真理を伝聞したに過ぎないと考えた³⁸。モアは当然三位一体に強い関心と執着を示したが、それは決してピュタゴラスやプラトンによって示されたわけではなくモーセによって示されたと述べている。結果として、プラトン主義者とカバラ学者の言う三位一体は同じ事態を表現している³⁹。

モアは、哲学的カバラには神学的真理に加えて自然的真理も含まれるとしている。シド人あるいはフェニキア人であるモクス (Mochus) という人物が粒子論に基づく自然学を示したという伝説があるが、これはモーセの異名であるとモアは解釈する⁴⁰。ピュタゴラスもモーセの教えを受け継ぎ粒子論を伝えたが、一方デモクリトスやレウキッポスなどについては、モアは彼らがモーセに由来する正しい教えの一面だけを受け取り、精神の存在を否定する誤った唯物論に辿り着いてしまったという。近代をみると、デカルト哲学は神によって創造された三つの粒子があるという説を含むが、モーセの粒子論の復興とも解釈されている⁴¹。また、モーセは魂が不死であることも教えているとされる⁴²。

カバラについては、モアは神聖な哲学を展開するにあたっての信頼できる手がかりだと考えた。そしてモアは、カバラで使用されるセフィロトという世界樹を示した図と、その中に表示される十の概念を詳細に論じ、それを真正な形而上学および自然学を示したものだとしている⁴³。またさらに、上位の概念としてエンソフ (Ensoph) をあげ、これは無限と結びつけられる⁴⁴。

一方十の概念は、ケテル (Kether)、コクマー (Chochmah)、ビナー (Binah)、ダアト (Da'at)、ケセド (Chesed)、ゲブラー (Geburah)、ティファレト (Tiphereth)、ネツァク (Netzach)、ホド (Hod)、イエソド (Jesod)、マルクト (Malchuth) である。第一の概念ケテルは、一性、ヌース、精神 (mens) と結びつけられ、それは究極の原因でもある⁴⁵。コクマーはギリシア語で言えばソフィア、ロゴスであり、知恵と御言葉を人類にもたらす神の子とも結びつけられる⁴⁶。ビナーは母性および霊魂 (Spiritus) と結びつけられる⁴⁷。

最初の三つ以外は、神から流出した被造物の有様を示す⁴⁸。例えば、ティファレトは美であり、プラトンがかたっているような宇宙の秩序を示す。イエソドは基礎であり、宇宙が未来にわたって存続すること、および法則などを保持して安定した運行を示す⁴⁹。

他にも、モアは古代以降の様々な哲学者たちの説を、カバラを引用しながら正当化する時がある。例えば、アリストテレスはさまざまな知性をともなった天球が存在しているとしたが、この説は古代カバラの神秘に合致するという⁵⁰。またモアが強く支持している、魂が生物学的な誕生に先立って存在しているという説も、カバラを継承しているという⁵¹。

3.2 ゴロアスターとヘルメス・トリスメギストス

ゴロアスターは優れた哲学をカルデア人に伝え、ヘルメスはエジプト人達にそれを伝え

ているとされてきたが、彼らに対するモアの評価はどのようなものなのだろうか。

モアは時にゾロアスターや『カルデア信託』に言及したりする。『カルデア信託』はマジたちによって伝えられているものと認識され、プレトンがそれらを高く評価していると記している⁵²。またモアはフィチーノのように一種の古代の賢人たちの系譜をあげてみる時があり、ピュタゴラス、キケロ、プロティノス、プロクロスなどとともにゾロアスターが挙げられている。

ヘルメスについては、モアはプラトン主義者として、プラトン自身とともに、フィチーノ、ヘルメス・トリスメギストスを挙げている⁵³。また、ヘルメスの、神が中心がどこにでもある円だという教えも紹介されている⁵⁴。そして、ヘルメスは動物に魂があることを認めていたという⁵⁵。

3.3 ピュタゴラス

モアは頻繁にピュタゴラスに言及するが、ピュタゴラスはモーセの哲学を拝借しているともされている。総じてピュタゴラスおよび古代イタリアの哲学者たちはフェニキア人たちの影響などを受けており、結局ヘブライ人から伝播した哲学を受け継いでいるとされているのである。したがって例えば、モアはピュタゴラスが単独で三位一体の神秘を発見したという評価は間違いであると考えている。

モアは、ピュタゴラスが神的生の至高性は真理と善意に存するとし⁵⁶、神があらゆるところに現前しているとしたという⁵⁷。

またピュタゴラスは惑星の運行についてもよく考えており⁵⁸、天体もまた叡智によって秩序付けられていたことに気づいているとした。またモアによると、ピュタゴラスはモーセ由来の粒子論ももっており⁵⁹、あらゆるものに種、形相が含まれているとも主張した⁶⁰。

魂の分析についていえば、ピュタゴラスはすでに、魂を理性、気概、欲望という三つの部分にわけて考えていた⁶¹。またモアは、ピュタゴラス主義者たちが人間は自らの生を美しいものにするべきとし⁶²、なすべきことをなす習慣という徳の定義も紹介しているとする⁶³。また、ピュタゴラスは、寝る前に神に感謝をすること⁶⁴、神をおそれ恥ずべき行いを反省することをもとめたという⁶⁵。さらにピュタゴラスは、動物の魂は身体とは区別された実体で身体が減んでも存続するとした⁶⁶。

3.4 プラトン

ケンブリッジ・プラトニストの代表格であるモアは当然、プラトンに積極的に言及し高く評価している。ただプラトンもピュタゴラスとともに、モーセの影響を受けていることは強調されている。

プラトンは、善、知恵、魂の三位一体を説いているとモアは解釈している⁶⁷。ここで知恵は父ではなく子の位格を示し、神の愛をも示している⁶⁸。プラトンもピュタゴラスとともに、神があらゆるところに現前しているとしたが⁶⁹、それはカバラにも合致する。

自然哲学についていえば、プラトンもピュタゴラスとともに、あらゆるものに種、形相が含まれているとした⁷⁰。

モアはまた、プラトンによる魂の分析を高く評価する。例えば『パイドロス』に示される魂の諸部分の相克がそれにあたる⁷¹。

さらにモアによれば、プラトンは世俗的な徳を超えて、この世を魂が超出していくことの価値を説いた⁷²。プラトンの哲学でもっとも重要なことからは、肉体をのがれること、「死の瞑想」である、ともされる⁷³。動物の魂については、プラトンもピュタゴラスと同様、動物の魂は身体とは区別された実体だとした⁷⁴。

3.5 アリストテレス

モアのアリストテレスに対する評価は複雑である。一方でモアはアリストテレスに敬意を払い、自分が正しいと信じる説を主張するときにアリストテレスも同様に主張していると論じたりする。他方ではモアは、アリストテレスは評価を得た幸運な哲学者であると感じており、他の哲学者に比べて別格扱いされすぎであるとも示唆している。

モアは特に学問の方法論や概念的な分類に関して、アリストテレスを高く評価しているようだ。モアにとって、形而上学とは第一哲学であり⁷⁵、非物体的なものを正しく観想するすべであり、アリストテレスの著作に名前が由来している⁷⁶。またモアは、アリストテレスが学においては原因に言及することがもとめられることを示した、ともしている⁷⁷。またアリストテレスは普遍は実体ではないとし、現実に存在するものがなにであるかを示した⁷⁸、すべての区別は基体にあるものか、理性によるもの（概念的なものか）だとし、それらの混同も戒めたという⁷⁹。

神学については、アリストテレスは『自然学』で（アナクサゴラスと同様に）不動者を要請し、神の存在を知る手がかりを示したという⁸⁰。また神は自らを知性認識するとし⁸¹、知性と神の関係に関する優れた考察を残したことが示唆されている。

天体論に関していうと、さまざまな知性をともなった天球があるというアリストテレスの説は、古代カバラの神秘に合致するとされる⁸²。

自然学においては、アリストテレスは自然は無駄にはたらくことがないとしていたが、それがモア自身の真空の否定に援用される⁸³。

魂の分析についていうと、アリストテレスは命令を下す部分と、命令に従う部分の両方が、理性をもつとしていたという⁸⁴。またモアは人間は野獣でも神でもないという『政治学』の主張に同意している⁸⁵。さらに、アリストテレスは動物に魂があることを正しく伝えた⁸⁶。

3.6 他の哲学者たち

以下ではいわゆる新プラトン主義の流れに属するとされる古代からルネサンスにいたるまでの哲学者たちをモアがどう評価したかを整理し、その後それ以外の古代以降の哲学

者たちがどう評価されていくかを見ていくことにしたい。

モアはそれなりの頻度でプロティノスに言及をしている。モアは優れた哲学がプロティノスの魂にもっとも幸福な状態をもたらしたこと⁸⁷、それがピュタゴラス、プラトンたちの清らかな魂たちとともにやすらっていることを示唆している。またプロティノスは、人間にとっての真理を尊び⁸⁸、徳の基礎である理性が、より高次のものから我々に与えられたことを教えた⁸⁹。

モアによると、ポルピュリオスは知性がもたらす知識を尊び⁹⁰、矛盾したものは偽であるとした上で、神が存在するのに神がどこにもいない（場所をもたない）ということが矛盾であることを示唆したという⁹¹。

プロクロスはイオブ（ローマの主神ユピテルの別名）を生命の作者とし⁹²、我々が一人の偉大な創造神の被造物であることを示したとされる。またプロクロスは、物体も精神もどこかに存在し場所をもつことも示したという⁹³。

ルネサンスの哲学者たちについていえば、モアは物質が不活性な存在であるということに関してフィチーノや他のプラトン主義者たちとデカルトの説が一致しているとしている。またフィチーノの心身関係論によれば、魂はその本質からして、身体に位置付けられ（身体を場所とし）これを支配するという⁹⁴。

新プラトン主義者以外の哲学者に触れよう。モアはアナクサゴラスが、世界は生命をともなった原理によって運行され、そこには法則性があることを示唆していたとされ⁹⁵、不動者⁹⁶、無限なるものが存在することも理解していたとされる⁹⁷。またモアはキケロが、理性を重んじることを正しく教え⁹⁸、身体が牢獄であり死が解放であることを示唆したという⁹⁹。

結語

モアの哲学的キャリアは、カルヴァン派の教義に対する疑いとともにはじまった。そしてそれと青年期より彼が対置していたのは、きわめて主知主義的な哲学である。モアにとって、神は知性によって客観的な善を認識し、それに従って宇宙を組織する創造者であった。また人間は神によって知性・理性を植えつけられ、様々な真理を認識する能力を有していたのであった。以上の神観と人間観は、ゴトフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）やクリスティアン・ヴォルフ（Christian Wolff, 1679-1754）によって後にあらたな発展を与えられたとっていいだろう。

ところがモアは、彼が若い頃書いた神を称える詩からも読み取れるように、神秘主義者としての側面も持っていた。モアのヤコブ・ベーメ（Jakob Böhme, 1575-1624）に対する複雑な評価も、モアが神秘主義的な思想を保持していたことを示唆する¹⁰⁰。モアにとってベーメは理性を軽視する熱狂的な宗教家ではあるが、しかし一心に神に近づこうとしている誠実な人物でもあったのである。そして後に、ラルフ・ワルド・エマーソン（Ralph

Waldo Emerson, 1803-82) は『大霊 (The Over-Soul)』という著作の冒頭にモアを引用することになる。

モアの哲学史研究における業績を挙げるとするならば、今日的視点からみると誤っているように思えるかもしれないが、古代ギリシアの哲学者たちの重要な説がモーセに由来していると論じた点が主要なものになるだろう。そしてこの主張に関して言えば、モアの主知主義的な精神を引き受けたライブニッツは、彼の強力な論敵となっている。ライブニッツは『ウィーン講演』において、ヘブライ人たちではなくギリシア人たちこそが別格であることを強調したのであった。彼によれば、ヘブライ人たちは宇宙を創造した神について語ったが理性を用いることが十分にはできておらず、プラトン、アリストテレスにおいてこそ真の合理的な神学が確立されたのである¹⁰¹。さらにライブニッツがマテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610) から引き継いだ、古代中国人が普遍的な神学を有していたという理解も相まって、モーセは哲学史における最重要人物であるとは認識されなくなっていくのである¹⁰²。

略号：

A = *Antidote against Atheism*, cited by chapter and section.

AT = *Oeuvres de Descartes*, cited by volume and page.

CC = *Conjectura Cabbalistica*

DD = *Divine Dialogues*, cited by volume and chapter.

IS = *The Immortality of Soul*, cited by chapter and section.

PC = *The Philosophic Cabala*, cited by chapter and section.

W = G.W. Leibniz, *Wiener Vortrag*, In "Leibniz, Platonism and Judaism: The 1714 Vienna Lecture 'The Greeks as Founders of a Sacred Philosophy'" In D.J. Cook, H. Rudolph and C. Schulte eds. *Leibniz und das Judentum* (pp. 95-113), 2008, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

文献

カッシーラー、E (1993). 『英国のプラトン・ルネサンス—ケンブリッジ学派の思想潮流』 東京：工作舎

Crocker, R. (1990a). "Henry More: a biographical essay. In S. Hutton ed. *Henry More (1614-1687) Tercentenary Studies*. Dordrecht: Kluwer. pp. 1-18.

—, (1990b). "Mysticism and enthusiasm in Henry More." In S. Hutton ed. *Henry More (1614-1687) Tercentenary Studies*. Dordrecht: Kluwer. pp. 137-156.

Hall, A.R. (1990). *Henry More: Magic, Religion and Experiment*. Blackwell: London.

Henry, J. (2016). "Henry More", *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.

Hutton, S. (1990). "Henry More and Jacob Böhme" In S. Hutton ed. *Henry More (1614-1687) Tercentenary Studies*. Dordrecht: Kluwer. pp. 157-168.

- , (2004). *Anne Conway: A Woman Philosopher*. Cambridge: Cambridge University Press.
—, (2015). *British Philosophy in the Seventeenth Century*. New York, NY: Oxford University Press.
—, (2020). “The Cambridge Platonists”, *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
Reid, J., 2012, *The Metaphysics of Henry More*, Dordrecht: Springer.

(注)

- 1 筆者がケンブリッジ・プラトニストたちに着目することができたのは、京都大学文学部で三原就平氏が主催されていたカドワース『宇宙の真の知的体系』読書会に参加したことが機縁となっている。本稿はまったく拙いものであるが、今後の研究の継続によって学恩に報いたい。
- 2 カッシーラー 33-37頁参照
- 3 カッシーラー 44-57頁およびHutton 2020参照。
- 4 Henry 2016
- 5 Hull 1990, p. 83
- 6 Crocker 1990a, p.1
- 7 Henry 2016
- 8 Crocker 1990a, p.2
- 9 Hull 1990, p.3
- 10 Henry 2016
- 11 Crocker 1990a, p.3
- 12 Crocker 1990a, p.4
- 13 Henry 2016
- 14 Cf. Hutton 2015, pp. 148-149.
- 15 Crocker 1990a, p.6
- 16 Hutton 2004, p. 19
- 17 Hutton 2004, p. 24
- 18 Henry 2016
- 19 IS.9.1
- 20 AA.9.3
- 21 AA.1.1
- 22 DD.2.24-25; Henry 2016
- 23 AA.7.1
- 24 DD.1.26-28; Reid 2012, pp. 110-111
- 25 AA.7.3
- 26 IS.Preface.3
- 27 AA.7.4-5; Reid 2012, p. 55 モアは例えば、二つのボールが二マイルの真空空間を隔てて存在するは可能だと示唆している。
- 28 AT.5.309; Reid 2012, p. 56
- 29 PC.9.2
- 30 IS.Preface.3; Reid 2012, p. 71
- 31 AA.2.2.13

- 32 CC.Preface
- 33 IS.12.1
- 34 IS.8.1
- 35 この考え方は、モナドは宇宙創造とともに存在し宇宙全体の破壊と共に初めて滅びるという、
ライプニッツの哲学に受け継がれる。
- 36 IS.2.12.4
- 37 IS.2.14.3
- 38 CC.foreword
- 39 O.331
- 40 CC. Appendix to the Defence of the Philosophick Cabbala.1.8
- 41 O.116
- 42 CC.foreword
- 43 O.424
- 44 O.431
- 45 O.431
- 46 O.431-2
- 47 O.439
- 48 O.448
- 49 O.517
- 50 O.423
- 51 O.558
- 52 IS.2.12.9
- 53 O.vii
- 54 O.148
- 55 O.697
- 56 O.17
- 57 O.671 = DD.1.32
- 58 O.113
- 59 O.116
- 60 O.651
- 61 O.42
- 62 O.11
- 63 O.16
- 64 O.76
- 65 O.84
- 66 O.608
- 67 O.767 = DD.3.46
- 68 O.766 = DD.3.45
- 69 O.671 = DD.1.32
- 70 O.651
- 71 O.27
- 72 O.170, 605

73 O.75, 88

74 O.608

75 O.157

76 O.141-2

77 O.156

78 O.150

79 O.154

80 O.169

81 O.330

82 O.423

83 O.26

84 O.26

85 O.65

86 O.689

87 O.90

88 O.24

89 O.73

90 O.148

91 O.148

92 O.519

93 O.169

94 O.310

95 O.9

96 O.169

97 O.170

98 O.47

99 O.91

100 Croker 1990b及びHutton 1990参照。

101 W.113

102 本稿はJSPS科学研究費（課題番号：20K0018）の助成を受けている。

